各　　位

2024 年 6 月 18 日
株式会社 山と溪谷社
https://www.yamakei.co.jp/

**探検家・角幡唯介氏、絶賛！　知られざるノンフィクションの名作にして、野生みなぎる犬たちとの感動必至の物語、ヤマケイ文庫『アラシ』発刊！**

---

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、ヤマケイ文庫『アラシ　奥地に生きた犬と人間の物語』（今野保：著）を発刊いたしました。

**角幡唯介氏、大絶賛！**
**「傑作！　ジャック・ロンドンの『野性の呼び声』そこのけのすごい話だった。」**

吹雪の夜に迷い込んできた山犬の仔は、過酷な北海道の原野を生き抜き、やがて仲間とともに山奥へ消えた――。
犬と人の絆、野生の掟、生と死がせめぎ合う伝説の名著。

川で溺れかかった今野少年を救ったクロ（Ⅰ）。嵐の夜に迷い込んできた山犬・アラシとの絆と野生の掟に従い訪れる別れ（Ⅱ）。大熊をも倒したという勇猛果敢なタキの話（Ⅲ）。人と驚くほど意思を通じ合わせることのできたノンコのこと（Ⅳ）。
北海道の美しく過酷な大自然の中で、犬と人間との間に刻まれる４つの物語。野生みなぎるノンフィクションです。解説／角幡唯介。

アラシ　目次


Ⅰ　クロ

1　鶏小屋の侵入者 ―― 12
2　野犬の群れ ―― 17
3　夜の山道 ―― 21
4　旅立ち ―― 27
5　別れのとき ―― 32

Ⅱ　アラシ

1　山火事 ―― 46
2　吹雪の夜 ―― 52
3　山犬の群れ ―― 61
4　夜襲 ―― 76
5　身近な出来事 ―― 95
6　吹雪の道で ―― 107
7　山へ帰る ―― 124

Ⅲ　タキ

1　働きもの ―― 146
2　大きな足跡 ―― 151
3　毒矢 ―― 157
4　野辺送り ―― 164

Ⅳ　ノンコ

1　悲鳴 ―― 176
2　心を読む ―― 185
3　習癖 ―― 193
4　野性の戦い ―― 206
5　離散 ―― 218

あとがき ―― 227
解説　角幡唯介 ―― 233


裸の山と化し、人々の眼に異様な姿をさらすことになった。

## 2　吹雪の夜

話は少し遡る。山に事務所と家が出来上がり、皆が市街の借家から引っ越しをして間もないある日、市街に用事で出かけていた父が夕方、一頭の犬を連れてもどってきた。その犬は全身、真っ白のフサフサした長い毛で覆われた大型犬で、シロという名前であった。大きな体に似合わず実におとなしく、私たち兄弟が背中に乗ったり首に抱きついたりしても、怒るどころか嫌がりもしなかった。

だが、翌日の昼過ぎ、私たちが少し目を離したすきに、シロは忽然と姿を消した。きっと元の飼主のところに帰ったのだろうと見当をつけた父が、次の日、シロを連れもどしてきたけれど、シロはいかにもしょんぼりとして元気がなく、与えられた飯を半分近くも残すほどで、それから三日後にはまたもや姿を消してしまった。



その翌日、今度は元の飼主がシロを曳いてきた。母とひとしきり談笑した後、その人がお辞儀をして家の角を回り、歩み去ろうとしたとき、後ろ姿をじっと見つめていたシロがウオオーンと、悲しみに満ちた声で鳴いた。

その光景を見、声を聞いた長姉は思いつめたように立ち上がると、走ってその飼主の跡を追い、道に出たところで呼び止めた。そして涙を浮かべながら、夏の初めにむごい別れをしなければならなかった愛犬クロのことを話し、連れて帰ってほしいと頼んだ。飼主は長姉の話に深くうなずいて、シロと一緒に帰っていった。

夕方、山回りからもどった父も、母から一部始終を聞いて無言のままうなずき、二度と犬を連れもどしには行かなかった。

秋が日一日と深まって、火事で黒焦げになった向かい山も間もなく雪に包まれる頃、峰の左端に切った火防線から山裾にかけての斜面を埋める混生林の中から七、八頭の山犬が現われた。鈍色の空の下、その群れは水平に伸びる峰を一列になって左から右へゆっくりと進み、本間沢本流に至る山道の右手の原生林の中へ姿を消した。

山犬はどれも体が大きく、とりわけ先頭に立つ一頭はほかの犬より一回り大きく見えた。

窓辺に立ってその有様を眺めていた私に、母が背後から、

「あの犬は昔エゾオオカミといわれたものとそっくりだよ。だから、けっしてそばに行ってはいけない、喰われてしまうからね」

と言った。

山犬の群れはその後、ほぼ一日おきに姿を見せたが、やがて本格的な冬がきて大雪の日が続くようになると、さらに頻繁に現われるようになった。そして野山も川もすべてが雪に閉ざされると、食が得られなくなったらしい、我が家の馬小屋に隣接する鶏小屋に狙いをつけ、夜ごと襲ってくるようになった。もっとも、小屋は頑丈に作ってあって、犬の力で破れるものではなく、鶏をとられたことは一度もなかった。

――その日の天候は、それはひどい荒れようで、未明に吹きだした強風とともに雪が降りつのり、目を開けていられぬほどの猛吹雪となった。めったに学校を休んだことのない次姉や兄たちも、父の判断で登校を見合わせることにした。





ピューピューと唸りを上げて荒れ狂う吹雪は、夕方になってもなお治まらず、山間の一軒家は白い闇から黒い闇の中へ没しようとしていた。

私たちは早めに夕飯をすませ、板の間の囲炉裏に据えられた薪ストーブを囲んで就寝前のひとときを過ごしていた。ストーブには三尺（約九十一センチ）に切った薪が差し込まれ、パチパチと音をたてて燃えていた。火勢が強く、厚い鉄板でできたストーブの外側にまで赤い色が浮いて見える。

こうして激しい吹雪の夜もふけ、それぞれが布団に入る時間となったが、その前に、身支度を整えた長姉が雪かきを手に外へ出た。玄関から外便所までの径に積もった雪を片付け、歩きやすくするのである。（当時、山暮らしの家には内風呂、内便所などはなく、それらは外にしつらえてあった。）

子どもたちは先を争うようにして小用に走り、ぐずぐずしていた私も母に促されて飛び出すや、風と雪に顔をそむけながら、やっとの思いで便所に駆け込んだ。

用を足している間も、烈風が板戸をガタガタと揺らし、粉雪が板張りの隙間からヒューという音とともに吹き込んでくる。

板戸にあたる風が少し弱まるのをまって便所を出た私は、玄関に向かって走りだした。そして玄関を囲うように下げてあるムシロにたどり着く寸前、何かが足元にまとわりついてくるのが見え、その瞬間、私は爪先で思いっきりそれを蹴飛ばしてしまった。雪の上を白い物体が転がって停まり、それが突然、ムクムクと動きだした。

立ちすくんだ私の足にふたたび絡みついてきたものは、犬――仔犬だ。私は思わずそれを抱き上げ、吹雪に背を向けながらムシロの中へ入り込んだ。

体に付いている雪を払い落としてやると、仔犬は喜びを全身であらわして私の口や鼻のあたりをペロペロと舐め回した。

私は玄関のガラス戸を開けて土間に入り、後ろをしっかりしめてからストーブの燃え盛る囲炉裏の端に、抱いていた仔犬を放してやった。ランプの灯りに浮かび上がった仔犬が、滑る板の間に足をとられながらも右へ左へと走り回った。

「なんだ保、それ犬の仔っこでないか。どこにいた？」

と父が声をかけた。戸口の外にいたと話すと、父は、もっといるかもしれないと言って身支度を整え、吹雪の中へ出ていった。そしてしばらくして、何もいなかったと言いながらもどってきた。





可愛い、可愛いと言われながら皆の手から手へ渡され、抱かれた牡の仔犬は、小さな尻尾をせわしなく振っては誰彼なしに愛嬌を振りまいた。

長姉が手頃な木箱を出してきて中に麻袋を詰め、その上にボロ布を敷いてから仔犬を入れてやった。そして上からふんわりと麻袋を掛けてやると間もなく、仔犬は目を閉じておとなしくなった。長姉は寝ついた仔犬を暖かい囲炉裏端に置き、火の始末をしてランプを吹き消してから、布団に入った。外はぜん激しく吹雪いているらしい、暗闇の中でギーッ、ギーッと柱か何かが軋む音がいつまでも鳴っていた。

この日、父や母が何よりも心配したのは、この犬の仔が秋の終わり頃から向かい山の峰伝いや急斜面にたびたび姿を見せていた、エゾオオカミに似た山犬の仔ではないのかということであった。山犬の仔が吹雪のさなか親にはぐれてしまい、迷子になって来たものとすれば、必ず親犬がこの近くにいて、仔犬を連れもどしにくる、と父や母はそれぞれ語り合って、子どもたちに十分注意するよう言い聞かせた。だがそれとは別に、父は、

「これは、山犬の親がここに連れてきて置いていったものだろう。この近くには、こんな仔犬の生まれるような犬を飼っている家は一軒もないしな」



## ■内容

Ⅰ　クロ
Ⅱ　アラシ
Ⅲ　タキ
Ⅳ　ノンコ
あとがき
解説　角幡唯介

## ■著者略歴

今野保（こんの・たもつ）

1917 年、北海道早来町生まれ。奥地での製炭業を経て、1937 年から 26 年間炭鉱に勤務。その後、室蘭にて土木会社を設立。1984 年に事故で右手を負傷するが、入院中に左手で文字を書く練習を行い、その後、執筆活動を始める。著書に『渓流の想い出』『染退川追憶』（以上、私家版）、『アラシ―奥地に生きた犬と人間の物語』『羆吼ゆる山』『秘境釣行記』がある。2000 年、逝去。

■書誌データ
書名：ヤマケイ文庫『アラシ　奥地に生きた犬と人間の物語』
著者：今野保
発売日：2024 年 6 月 18 日
定価：1100 円（本体 1000 円＋税 10%）
248 ページ／文庫判／1 色刷
https://www.yamakei.co.jp/products/2824049990.html

【山と溪谷社】　https://www.yamakei.co.jp/
1930 年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。
さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】　https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。
さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

---

【本件に関するお問合せ先】
株式会社山と溪谷社　担当：綿
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング
TEL03-6744-1900　E-mail: info@yamakei.co.jp
https://www.yamakei.co.jp/